

ガロ・ロマンス語におけるいくつかの類推現象について
Quelques changements analogiques des verbes gallo-romans

矢島 猷三
Yuzo YAJIMA

「ロマンス語研究」26において¹⁾、ガロ・ロマンス語、特に北フランス語の動詞現在語幹の形成に関わる幾つかの類推作用についての考察を行った。その際に依拠したのが、La Chaussée の主張する3つの原理 — langue における majoritaire, discours における majoritaire, 連想作用による対 (couple) の形成 — である。今回はこの同じ枠組みに基づいて、別の分野の動詞形態 (主として完了系列) のアナロジー現象について分類を試みることにしたい。なおこの論は、1994年5月に鹿児島経済大学で開催された第32回日本ロマンス語学会大会での口頭発表に基づくものである。

La Chaussée の説く原理を略述するならば、langue の majoritaire とは或る体系の中で優勢を示すものが劣勢なものにとって代る場合である (この場合優勢を示すものは、同時に“言”の中でも頻繁に現われるものが多い)。discours における majoritaire とは discours の中で或る形が高い頻度で出現することにより、他に作用を及ぼすケースである。連想によるペアの形成とは、discours における頻度の大小の別を判断することができないにもかかわらず、或る一方向へ類推が及ぶ場合である (これは同時に、langue における優勢、劣勢とも無関係としてよいであろう)²⁾。

parisyllabique が imparisyllabique へ変容する現象は、厳密には名詞及び形容詞に関わる変化であるが、同時に動詞の現在分詞形においても現われる。そしてこれは、langue の majoritaire が minoritaire を排除する判りやすく典型的なケースである。主格 PORTANS は斜格形 PORTANTIS, PORTANTĪ, PORTANTE などからの類推によって属格と同じ portantis を取ることになるが、これは paradigme の中で多数を占める形 (音節数) に自らを同化したものであり、つまりは langue の système としての圧力に屈したものであるとすることができよう。これによって同一の語が同一の音節数によって統一され、かくして等数音節語が誕生することになる。現在分詞はすべて同じ方向を取る。

同じ langue の majoritaire, 即ち minoritaire の排除³⁾、に分類されるものに、3 b 活用動詞の第4活用動詞への融合のケースがある。CUPERE, FODERE, FUGERE, RAPERE が cupire, fodire, fugire, rapire となるのは、CAPIO~AUDIO, CAPIT~AUDIT,

CAPIUNT～AUDIUNT などの 3 b 活用と第 4 活用の間の共通の語形を軸として、双方が同じ活用形を持つことになるからだが、この場合は何か一つのパラディグムが問題なのではなく、多数のパラディグムに関わる現象である。通常 3 b 動詞と称している動詞群は、その由来はともかく、古典ラテン語という平面での語形のずれのみを取り上げるならば 4 b 動詞と称してよいかもしれない。第 4 活用との共通性を確かめるには、直説法現在を比べるだけでは十分ではない。未完了過去においても (CAPIEBAT～AUDIEBAT), 未来においても (CAPIET～AUDIET), 受動態においても (CAPIEBATUR～AUDIEBATUR; CAPIETR～AUDIETR), 接続法でも (CAPIAM～AUDIAM, CAPIAT～AUDIAT), 3 b と第 4 の共通性、同一性は大きいのである。従って第 4 活用からすれば 3 b 活用は例外的タイプの様相を呈していることになる。このように多くのパラディグムに現われる同一形態を軸として、3 b 活用は第 4 活用に吸収される。

PLANCTUS 型の完了分詞が FICTUS を fictus に変えるアナロジーも、やはり langue の majoritaire, minoritaire に関わる現象である。PLANCTUS は現在語幹 PLANG-, 完了語幹 PLANX- を持ち、現在、完了、完了分詞三つの語幹に接中辞 -N- を備える点で、JUNGO, JUNXI, JUNCTUS; UNGO, UNXI, UNCTS などと共通である。一方 FICTUS は現在語幹、完了語幹では同じ -N- を持っているが (FINGO, FINXI), 完了分詞にはこれを欠いていることになる。PLANCTUS 型動詞からすれば、完了分詞にのみ -N- を欠く動詞は不規則で例外的である。このアナロジーによって fictus のみでなく、attanctus(-TANGO, -TANXI, -TACTS), infranctus(-FRANGO, -FRANXI, -FRACTS) が生じることになる。この接中辞 -N- は、古くはラテン語現在語幹に固有のものが完了幹、完了分詞幹に拡大されたものである。従ってこのアナロジーは、古くからの傾向が継続していると見ることができる。いずれにせよこの場合の langue とは、前三者とは異なり、或る動詞の具体的な変化表的パラディグムの一部または全体に関するのではなく、いわばそれを横断する形での、或る動詞タイプの統一性に関わるものと言うことができる。

完了 2 人称語尾は -STI である (AMASTI, DORMISTI, MISISTI)。これが北部ガロ・ロマンス語では、語末母音 i の消失のあと t も発音されなくなる。しかしこの t の消失は音声変化ではない。他のテンスの 2 人称語尾からの類推である。他のテンスでは AMAS, MONES, SCRIBIS; AMABAS, HABEBAS; LEGES; AMES, AUDIAS の如くにすべてが -S で終る。即ちすべてのパラディグムの 2 人称語尾の中で、完了語尾のみが例外的な形をとっていることになる。この類推は 2 人称語尾という langue の枠の中での作用であると言えよう (→amas, dormis, misis)。

古い時代からのアナロジーの動きの延長線上にあるという点では、si 型完了の形成も同じである。語幹末に s を持つ完了語幹は他の印欧語の aoriste sigmatique に対応するものであるが、その古くからの productivité によって、古典ラテン語では w を持つ完了語幹 (AMAVI,

AUDIVI) と共に完了タイプの大きな部分を占めている。RISI→PRENDI→presi は同じ -SUS で終る完了分詞 RISSUS, PRE(N)SSUS を仲介とするものであり, PLANXI→TETIGI→tanxi は -ANGERE を共有する不定法 PLANGERE, TANGERE が軸になっている。P. Fouché によれば, この si 型完了を生じる際に比例式の共通項となるものは完了分詞 -SUS (他に morsi (cl. MOMORDI), occisi(OCCIDI), sessi(SEDI)), 不定法〔他に cremsi(TREMUI), premsi(PRESSII)〕の他に, 完了分詞 -TUS (TORTTUS : TORSI = VOLTTUS : volsi) (tolsi(TULI), valsi(VALUI)), 完了分詞 -CTUS (DICTTUS : DIXI = LECTTUS : lexi) [doxi(DOCUI), elexi(ELEGI)], 完了分詞 -MPTUS (SUMPTTUS : SUMPSI = REDEMPTTUS : redempsi) がある。⁵⁾ このアナロジーは si タイプ以外の完了語幹, 即ち完了語幹なる langue の中での minoritaire, に対する排除と同化の作用である。

古くから見られた傾向が新たな現われ方をした例として, 完了分詞 -UTUS の拡大がある。古典ラテン語では完了分詞 -UTUS~完了 -UI を持つもの (TRIBUI~TRIBUTUS, STATUI~STATUTUS, CONSUI~CONSUTUS) の数は多くなかったが, 俗ラテン期にはこれが一挙に増大する。共通項として作用するのは完了形 -UI である。これによって -UI~-ITUS のペアであったものが, -UI~-UTUS に整理されることになる : HABUI~HABITUS→HABUI~habutus, DEBUI~DEBITUS→DEBUI~debutus, 以下 PLACITUS→placutus, TACITUS→tacutus, tenitus(TENEO)→tenutus, potitus(POSSUM)→potutus, sapitus(SAPIO)→saputus である。このアナロジーは -UI と UTUS という同じ u 音のペアを形づくるというだけにとどまらず, 背景に一般に完了語幹と完了分詞が形態上同一の母音を持つという傾向が潜んでいるものと考えられる。即ち第 1 活用 -AVI~-ATUS(AMAVI~AMATUS), 第 2 活用 -EVI~-ETUS(DELEVI~DELETUS), 第 4 活用 -IVI~-ITUS(AUDIVI~AUDITUS) は同一母音が繰り返される点で規則的であり, また同時に強い類推作用を持つものであったと思われる(なおこの規則性は, 一方では規則動詞の動詞語幹が infectum においても perfectum においても共通であることにも関連している)。-UI~-UTUS の一般化はこの規則性と軌を一にすることであり, 完了語幹と完了分詞の母音が同じでないものは正常でなく, 例外的な存在, 即ち langue の minoritaire に他ならないことになる。新らしい完了分詞 -UTUS を備えることになった動詞の中には, HABEO, DEBEO, そして第二次的に形成されたものとして POSSUM など discours での頻度が著しく高いと考えられるものがあるが, これら discours で majoritaire な動詞の持つ -ITUS が一般化しなかったことは, 出発点にあたるモデルの例が多くなかったにもかかわらず, 完了および完了分詞語幹の同一化の方が強く働いたことを示すことになる。-utus はその後以下に述べるすべての -dedi タイプ完了の完了分詞として用いられることになる (perdedi→perditus→perdutus, crededi→creditus→credutus, findedi~finditus→findutus, pendedi~penditus→pendutus, cadedi~caditus→cadutus)。この場合は

完了語幹と完了分詞の間に形態上の共通点はないので、-ui~-ūtus の形成とは別の原理を求めねばならないが、HABITUS→habūtus, potitus→potūtus など頻度の高い動詞の類推変化が影響を与えているとすれば、この場合は discours の majoritaire によるアナロジーとすることができよう。

完了語幹と完了分詞の母音の一致に関しては、同様のことが時代は下るが古フランス語期に近く HABEO の完了の弱語幹形に生じている。この動詞の各人称は òi, òüs, òt, òümēs, òüstēs, òrēt となっていたが、このうちの弱語幹形がそれぞれ ēüs, ēümēs, ēüstēs に変わる。これは完了分詞 ēü(く habūt) による類推作用と考えてよいであろう。⁶⁾ ただしこの場合、作用が強語幹形には及んでいないので、langue をめぐるアナロジーだとしても不完全なものに過ぎない。

俗ラテン語期に強い類推作用を発揮することになったものに、dedi タイプの完了がある。このタイプは DO の完了 DEDI が類推によって広まったものである。まずもともと DO の派生語に見られた -DO~-DIDI の組み合わせ (CONDO~CONDIDI, PERDO~PERDIDI, REDDO~REDDIDI, TRADO~TRADIDI) が -DO と -DIDI 以外の完了語幹との組み合わせを持つ動詞にアナロジーを及ぼす (DESCENDO~DESCENDI→descendidi, DEFENDO~DEFENDI→defendidi, RESPOND(E)O~RESPONDI→respondidi)。次いで俗ラテン語に広く見られる一般的傾向、recomposition: 動詞の派生語を構成要素に還元して、アクセントの位置をもとになる動詞の語幹の内部に移す (SUSTINET→sustenet)、によって -DIDI が -DEDI に変わり、上記の例はそれぞれ condedi, perdedi, reddedi, tradedi, descendedi, defendedi, respondedi となる。この一連の類推作用には discours において出現頻度が高いと予想される DO の影響が常に明瞭である。このことは当時のラテン語使用者が元来 DO の派生語でないものに対しても DO (与える) の意味を見てとってしまったことから容易に理解できる。CADO の完了形までが cadedi(←CADUI) と変えられているのである。

effet de couple なるものは La Chaussée によれば discours における majoritaire/minoritaire とは無関係の現象である。これは同時に langue をめぐる majoritaire/minoritaire とは無縁であると言ってよい。即ち頻度という基準から理解することは不可能なものである。自由に飛び回る連想作用の方向を分類の枠で捉える難しさがここにある。この、頻度とは無関係の、連想対(つい)の形成から生じたと考えられる幾つかのケースには次のようなものがある。langue, discours と何らかの意味でつながるものもある。

HABEO と SUM の頻度はいずれが大であるのかは容易には決め難い。そしてこの2つの動詞相互の間には、全く別方向の類推作用が見られる。第一はフランス語 ont の直接の語源にあたる abunt の形成される場合である。この語形は SUNT からの類推によるものと考えられている: SUNT ↔ (H)ABENT → abunt(> aunt > ont)。第二はフランス語 suis の出発点 suyyo

の生じる場合である。この形は HABEO の音声変化形 ayyo の類推によるものである：
(HABEO >) ayyo ⇨ SU(M) → suyyo (> sui-s)。この2つはアナロジーの方向が一定でなく、
予想し難いことの典型的な例であると言えよう。

discours の頻度に差異を認めることが難しいもの同士の間で類推方向が不定なさまは、不定法
の変化にも見られる。第2活用と第4活用は1人称の語尾 -EO, -IO が hiatus によって共に -yo
を生じ、これが共通項になって第2から第4へ、またその逆のアナロジーが予想されるが、実際に
生じたのは第2から第4の方向である (FLORERE → florire, GAUDERE → gaudire, IMPLERE →
implire, TENERE → tenire)。また第2活用と第3活用の間では現在分詞の形 (-ENS,
-ENTIS…) が共通である。この場合も両方向の類推が予想されここでは共にその例が見られるが、
第2活用から第3活用に変るものの方が多いようである (MORDERE → mordere, RESPONDERE →
respondere, RIDERE → ridere, TONDERE → tondere, TORQUERE → torquere; CADERE →
cadere)。なお La Chaussée が説くように mordere のタイプの形式には VENDO ~
VENDERE, PERDO ~ PERDERE の影響が大きいという見方に立てば⁷⁾、語幹末子音に d を持つ
動詞という、小規模ながらも systeme が関与することになり、effet de couple と同時に
langue の問題にもなる。また cadere, sapere が HABUI, HABERE タイプの影響による
とする見方 (HABUI: CADUI, SAPUI=HABERE: → cadere, sapere) は、HABEO の頻度
を考えれば discours に関わるものである。

俗ラテン語期の強変化の完了では、4人称形の内部でアクセントの移動が生じて MISIMUS →
misimēs となる。これは5人称からの類推とされているものであるが、どの強変化完了動詞にも
同じ類推が生まれているところから、discours で頻度の高い或るモデルがあったと考えられる。
該当するのが HABEO である。この動詞の完了形4人称 abuimēs が5人称 abuistis からの
アナロジーで abuimēs とアクセントの位置を変えるのは、4人称と5人称の間に discours に
おける頻度の大小を認めることが不可能なことから effet de couple に分類することもできよう。
しかしまた、この動詞の paradigme の中で u にアクセントの無いもの (即ち二重母音の副次的
要素 u を持つもの: abuī, abuīt, abuīsti, abuīstis) とアクセントのあるもの (即ち母
音 u を持つもの: abuimēs, abuērunt) の対立があり、アクセントを持つものが例外的で
minoritaire なためにアクセントが他の位置に移動した (abuimēs → abuimēs, abuērunt
→ abuērunt) と見るならば⁸⁾、このアナロジーは langue の minoritaire/majoritaire の問題
になる。いずれにしても次の段階では、HABEO の頻度の高さが他の parfait fort に同様のアナ
ロジーを生ぜしめているところから discours の majoritaire が関与することになる。またこの
アクセントの移動は強変化完了だけが原因なのではなく、音声変化の上からすでに kantammēs
(<kantavmēs < kantawimus), dormimēs (<dormimēs < dormiwimus) に達していた数多
の弱変化完了動詞4人称からのアナロジーも考えられるとすれば⁹⁾、この場合は多くの動詞に支え

られた人称語尾形の問題なので、別種の *langue* の問題が介入することになる。

強変化完了 $\text{V}\bar{\text{E}}\bar{\text{N}}\bar{\text{I}}$ は、語末の $\bar{\text{I}}$ が *dilation* の作用を強勢母音の $\bar{\text{E}}$ に及ぼすところから $\bar{\text{E}} > \bar{\text{I}}$ の変化を生んで $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}$ となる。この現象は音声変化であるが、この形が同じパラディグム内の他の強語幹形に類推作用を及ぼして $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{t}}$ (← $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{t}}$), $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{e}}\bar{\text{r}}\bar{\text{u}}\bar{\text{n}}\bar{\text{t}}$ (← $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{n}}\bar{\text{e}}\bar{\text{r}}\bar{\text{u}}\bar{\text{n}}\bar{\text{t}}$) を生み、その結果弱語幹形 ($\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}$, $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{m}}\bar{\text{u}}\bar{\text{s}}$, $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}$) との間に隔たりを生み出すことになる。強語幹形同士の 1 人称から 3・6 人称に及ぶこのアナロジーは、人称間の *discours* における頻度に相違を認めることができないとすれば *effet de couple* によって生じたと見なすことができるが、しかし一方で $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}$ はその意味から考えて使用頻度が他の人称形よりも大であるとすれば、*discours* における *majoritaire* のケースとすることができる。またこの見地に立つならば、同じ音声変化によって生じた高頻度の動詞形 $\text{f}\bar{\text{i}}\bar{\text{c}}\bar{\text{i}}$ (← $\text{F}\bar{\text{E}}\bar{\text{C}}\bar{\text{I}}$), $\text{t}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}$ (← $\text{T}\bar{\text{E}}\bar{\text{N}}\bar{\text{I}}$) も間接的にこのアナロジーに加担していることになろう。

同じく *dilation* が関与するケースで、しかしながらさらに *dissimilation* にも関わるケースとして $\text{V}\bar{\text{I}}\bar{\text{D}}\bar{\text{I}}$ の強変化完了がある。この動詞の弱語幹形、2 人称 $\text{V}\bar{\text{I}}\bar{\text{D}}\bar{\text{I}}\bar{\text{S}}\bar{\text{T}}\bar{\text{I}}$ の強勢母音 $\bar{\text{I}}$ は語末 $\bar{\text{I}}$ の *dilation* によって $\bar{\text{e}}$ とならず $\bar{\text{i}}$ のままであるが ($\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}$), この $\bar{\text{i}}$ が次に語頭母音の $\bar{\text{i}}$ を *dissimilation* によって $\bar{\text{e}}$ に変えてしまう ($\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}$)。この音声変化はアナロジーによって他の弱語幹形に移されて、4 人称 $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{m}}\bar{\text{e}}\bar{\text{s}}$ (← $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{m}}\bar{\text{e}}\bar{\text{s}}$), 5 人称 $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}$ (← $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}$) の形が生じることになる。この結果、 $\text{V}\bar{\text{I}}\bar{\text{D}}\bar{\text{E}}\bar{\text{O}}$ の完了のパラディグムの内部では弱語幹形 $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{-}}$ と強語幹形 $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{-}}$ ($\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}$, $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{t}}$, $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{d}}\bar{\text{e}}\bar{\text{r}}\bar{\text{u}}\bar{\text{n}}\bar{\text{t}}$) が対立することになる。このケースは弱語幹形の中の 2 人称から 4・5 人称へのアナロジーであって、両者に使用頻度の違いを認めないとすれば *couple* の形成によるものであり、 $\text{v}\bar{\text{e}}\bar{\text{d}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}$ が、同一変化を示すとともに頻度の高い他の動詞形 ($\text{m}\bar{\text{e}}\bar{\text{s}}\bar{\text{i}}\bar{\text{s}}\bar{\text{t}}\bar{\text{i}}$ ← $\text{M}\bar{\text{I}}\bar{\text{S}}\bar{\text{I}}\bar{\text{S}}\bar{\text{T}}\bar{\text{I}}$ など) によって裏打ちされているとすれば、*discours* における *majoritaire* と見なすべきものである。またさらに、音声変化の途中経過は異なっても俗ラテン期はじめの段階では結果として同種のパラディグムを持つことになる $\text{V}\bar{\text{E}}\bar{\text{N}}\bar{\text{I}}$ 型の活用の影響があるとすれば、今度は *langue* の *majoritaire* と結びつくことになる。同じことは逆に $\text{V}\bar{\text{E}}\bar{\text{N}}\bar{\text{I}}$ から $\text{V}\bar{\text{I}}\bar{\text{D}}\bar{\text{I}}$ を見た場合にも言えることである。

現在系列の動詞形態を考察した場合と同様、今回も三つの原理による分類の枠は大筋においては有効であると見なすことができる。しかし同じ一つの類推現象に複数の分類項目を適用せざるを得ない場合 ($\text{a}\bar{\text{b}}\bar{\text{u}}\bar{\text{i}}\bar{\text{m}}\bar{\text{e}}\bar{\text{s}}$, $\text{v}\bar{\text{i}}\bar{\text{n}}\bar{\text{i}}\bar{\text{t}}$ など) や、分類項目自体の柔軟的拡大解釈を行わねばならぬ場合 ($\text{a}\bar{\text{b}}\bar{\text{u}}\bar{\text{t}}\bar{\text{u}}\bar{\text{s}}$ など) の明らかになったことも事実である。複雑多岐を極める類推現象を整理するには分類原理のさらなる深化と細分化の試みが必要となろう。

注

- 1) 矢島猷三「仏語動詞の現在語幹の形成とアナロジーについて」, 『ロマンス語研究』26, pp107~114, 1993.
- 2) "... sans que l'on puisse invoquer une nette inégalité de fréquence en discours", (La Chaussée, Morph. hist. p11).
- 3) langue における minoritaire とは不規則なパラディグム (paradigmes anomaux), 例外形 (exceptions), 語彙数の少ない屈折の型 (types flexionnels représentés par un petit nombre d'unités lexicales) である (La Chaussée, Morph. hist. p8).
- 4) 『新ラテン文法』の「主要動詞の基本形一覧表」(pp396~417)によれば, 完了形が si で終わるものの数は第2活用 13, 第3活用 39, 第4活用 5, 計 57 であり, これは(半)形式所相動詞を除いた総数 205 の約4分の1に上る。なおこれには AMITTO, DIRIGO のような派生語は含んでいない。
- 5) Fouché, Verbe, pp281~282.
- 6) この現象を音声変化とする見方もある。La Chaussée, Morph. hist. p275, Zinc, Morph. p197.
- 7) La Chaussée, Morph. hist., p220.
- 8) La Chaussée, Morph. hist., p257.
- 9) La Chaussée, Morph. hist., p258.

主 要 参 考 文 献

- Anttila, R. *Analogy*, The Hague, Mouton, 1977.
- Fouché, P. *Morphologie historique du français, le verbe*, Paris, Klincksieck, 1967.
- Hoc, H. H. *Principles of Historical Linguistics*, Berlin, New York, Amsterdam, Mouton de Gruyter, 1986.
- La Chaussée, F. de *Initiation à la phonétique historique de l'ancien français*, nouvelle édition, Paris, Klincksieck, 1989.
- La Chaussée, F. de *Initiation à la morphologie historique de l'ancien français*, Paris, Klincksieck, 1977.
- Lanly, A. *Morphologie historique des verbes français*, Paris, Bordas, 1977.
- 松平千秋, 国原吉之助, 『新ラテン文法』第12版, 東京, 南江堂, 1982.

- Monteil, P. *Éléments de phonétique et de morphologie du latin*, Nathan, Paris, 1979.
- Picoche, J. *Précis de morphologie historique du français*, Nathan, Paris, 1979.
- Pope, M. K. *From Latin to Modern French*, Manchester University Press, 1973.
- Väänänen, V. *Introduction au latin vulgaire*, 3^e édition, Paris, Klincksieck, 1981.
- Zinc, G. *Morphologie du français médiéval*, Paris, P.U.F., 1989.